

山口国文

第 47 号

関 一雄先生 追悼号

卷頭言	森野正弘	1
<hr/>		
関 一雄先生著作目録		3
<hr/>		
関一雄先生の思い出	岩野訓子	9
故 関一雄先生へのお便り	檜原葉子	11
関先生の思い出	二階堂 整	12
関先生の思い出	田中(石井)敦子	14
関一雄先生をお偲びして	小野美典	15
<hr/>		
「勘解由小路」再考		
—— 関一雄先生からの宿題に答えて ——	勘解由小路承子	19
擬古物語の漢語動詞の特質		
—— 『源氏物語』との比較による ——	柚木靖史	35
奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における感情形容詞の多義の実態について		
	安本真弓	55
『浄瑠璃御前物語』十六段本考	紀実歩	69
毛利敬親の歌集『露山集』覚書		
—— 成立の問題と歌から窺われる敬親のまなざし ——	小野美典	79
金子みすゞと中原中也のリレー朗読会		
—— 実践報告と今後の可能性・問題点 ——	林 伸一	106 (1)
<hr/>		
トーク・ルーム		
大学における日本語・日本文学教育の役割	徳永光展	107
<hr/>		
学会彙報／会員消息／執筆者紹介／委員名簿／編集後記		

山口大学人文学部国語国文学会会則

第一章 総則

- 第一条 本会は山口大学人文学部国語国文学会と称する。
- 第二条 本会は事務局を山口大学人文学部日本・中国言語文学コース研究室内におく。
- 第三条 本会は会員相互の研究の向上と緊密な連携をはかることを目的とする。
- 第四条 本会は右の目的を達成するため左の事業を行う。

- 一 研究発表会 研究懇話会
- 二 雑誌「山口国文」の発行
- 三 その他必要な事項

第二章 会員

- 第五条 本会の会員は左の通り定めた者を以て組織する。
- 正会員 山口大学人文学部人文学科・日本・中国言語文学コース（文理学部人文学科・国文学、国語学・国文学専攻、人文学部言語文化学科・国語学、国文学、日本語文化論コース、日本語学・日本文学コース、人文学研究科・国語学、国文学、日本語文化論コース、日本語学・日本文学論）

特別会員 山口大学人文学部人文学科・日本・中国言語文学コース（文理学部人文学科・国文学、国語学・国文学、人文学部言語文化学科・国語学、国文学、日本語文化論コース、日本語学・日本文学論）

のう、本会の趣旨に賛同する者

山口大学人文学部人文学科・日本・中国言語文学コース（文理学部人文学科・国文学、国語学・国文学、人文学部言語文化学科・国語学、国文学、日本語文化論コース、日本語学・日本文学論）

（研究室内の元教員、及び委員会の推薦した者

第三章 委員

- 第六条 本会に左の委員を以て委員会を運営する。
- 代表委員一名、実行委員二乃至三名、他に委員若干名
- 第七条 代表委員、実行委員一乃至二名は教員会員を充てる。
- 第八条 委員は正会員の中から総会で選出する。卒業生の委

員については、卒業年次その他の諸条件を勘案し、在学生の委員については、学年を考慮する。

委員の任期は原則として二年とし、再任、重任は妨げない。

代表委員は、本会を代表して会務を統理する。実行委員は庶務・会計・編集の実務を担当し、その他の委員は代表委員を補佐して会務を分担する。

第四章 補 議

- 第十一条 会議は総会と委員会とする。
- 第十二条 総会は年次総会と臨時総会とし、年次総会は五月に開催し、臨時総会は委員会の議決を経て開催する。
- 第十三条 委員会は必要に応じ代表委員が招集する。
- 第十四条 年次総会は左の事項を処理する。

- 一 前年度の収支決算及び新年度の予算案
- 二 事業の報告及び計画
- 三 委員の選出
- 四 その他必要と認める事項

第五章 会 計

- 第十五条 本会の経費は会費、寄付金その他の収入による。
- 第十六条 本会の会費は毎年千円とする。ただし、教員会員は六千円、在学生会員は五百円とする。
- 第十七条 本会の会計年度は毎年四月一日にはじまり翌年の三月三十一日に終わる。
- 第十八条 会計監査二名をおき監査を経て総会で決算報告を承認する。

第六章 会則変更

第十九条 会則の変更は総会の議決を経て行う。

附 則

本会則は平成二十九年五月十四日から改正施行し四月一日から適用する。

（昭和五十二年五月一日制定、五十四年四月二十九日改正、六十年四月二十八日改正、平成四年五月十七日改正、平成八年五月十二日改正、平成十二年五月十四日改正、平成二十年五月十一日改正、平成二十九年五月十四日改正）

巻頭言

令和五年六月十九日、本学会の発展に長らくご尽力いただいた関一雄先生がご逝去されました。享年八十九歳でした。衷心より哀悼の意を表します。本学会には最近まで関先生のご著書やご論文が度々届いていたこともあって、突然の訃報に接し、事務局一同驚きを禁じえませんでした。急遽編集方針を見直し、関先生のご生前のお人柄を偲ぶべく追悼号を編むことといたしました。短い期間にもかかわらず、原稿をお寄せくださった方々にはこの場を借りて厚く御礼を申し上げます。

関先生は、昭和三十二年に東京学芸大学をご卒業後、東京教育大学大学院へお進みになり、昭和三十六年四月、山口大学にご着任されました。以来、三十七年間、文学学部、人文学部の国語学教官として教鞭をお執りになり、多くの学生たちをご指導されました。また、一時期は関先生お一人の体制であった国文科の専任教官を、国文学二名、国語学二名へと増員し、国語国文学研究室の礎を築かれるなど、より良い教育環境の整備にもお力を注がれました。平成十年三月に山口大学を定年でご退職された後は梅光女学院大学（現・梅光学院大学）に籍を転じられました。平成二十六年三月に同大学をご退職されるまで、都合五十三年間の長期にわたって大学教員としての人生を歩まれたことになりました。そのご功績に対し、平成二十六年度春の叙勲において瑞宝中綬章が授与されました。また、令和五年七月二十六日には正四位が追贈されております。

関先生のご研究は中古語を対象とするもので、特に語彙に関して精力的にご論考を重ねておられます。最初のご単著となる『国語複合動詞の研究』（笠間書院）を上梓されたのは昭和五十二年のことで、その年の佐伯国語学賞を受賞されました。以後、平成五年に『平安時代和文語の研究』（笠間書院）、平成二十一年に『平安物語の動画的表現と役柄語』（笠間書院）と、十六年毎にご単著を刊行され、最後のご単著となる『現代語訳で読み直す「竹取物語」』（笠間書院）は十年後の令和元年に刊行されました。第一著書で標榜された複合動詞を見つめる視点は、必然的に接頭語や接尾語をも視野に入れてのご研究へと発展し、そのご成果が第二著書としてまとめられました。今、「成果」という言葉を使いましたが、それらは新たな問いとしての側面を多分に含んでおります。複合動詞や、あるいは接尾語によって動詞化、形容動詞化した語が、なぜ物語・日記類に多く散見されるのかという問題意識のもとに、第三著書ではその解として「動画的表現」という概念が生み出されます。他にも、漢文訓読語が会話文に用いられている点に着目するところから「役柄語」という概念が提唱され、これらの概念の実践として第四著書が執筆されました。そして、ここでもやはり、「けり」や「侍り」をめぐる新たな問題が提起されることになっております。こうして概観される関先生のご研究に一貫してうかがえるのは「物語の言葉とは何か」という問題を追究し続けるご姿勢です。和歌とは異なる言葉の生成の在りようを、私たちは関先生のご著書を通して知らされることになるのです。

なお、私自身は関先生の訶咳に接する機会を逸してきたこともあり、本来、このような文面をしたためる任にございませんが、現在、学会代表の和田学先生が体調を崩されて療養中のため、代わって務めさせていただきます。何とぞご容赦ください。

（森野正弘）

学会彙報

二〇二三年度講義題目

大学院

第四八回 山口大学人文学部国語国文学会研究発表会

二〇二三年五月十四日(日)

山口方言における「じゃ」の使用について

—「じゃない」の用法を中心に—

色紙本『素性集』の再評価

後藤明生「笑い地獄」論

—社会を写す女性達—

金子みすゞと中原中也のリレー朗読会

—実践報告と今後の可能性・問題点—

第三七回 山口大学人文学部国語国文学会研究懇話会

(卒業論文発表会)

二〇二四年二月三日(土)

「尊い」の意味と対象の変遷

モダリティ「ソウダ」の在り方

—形容詞との関係性をめぐって—

『枕草子』日記的章段における〈終わり〉なき栄華

『椿説弓張月』阿公論

中原中也の詩におけるサウンドスケープについて

ライトノベルに描かれる異世界とその機能

—『ブーゲーム・ノローライフ』を例として—

日本語論(古代語)

日本語論演習(古代語研究)

日本語論演習(古代語文献講読)

日本語論演習(現代語研究)

日本文学論(中古)

日本文学論(近世)

日本文学論(近代)

日本文学論(近現代)

日本文学論演習(中古文学研究)

日本文学論演習(中古文学講読)

日本文学論演習(近世文学研究)

日本文学論演習(近世文学講読)

日本文学論演習(近代文学研究)

日本文学論演習(近代文学講読)

日本文学論演習(近現代文学研究)

日本文学論演習(近現代文学講読)

学部

日本語学概説(古代語)

日本語学概説(現代語)

日本語史

日本語学特殊講義(古代語)

日本語学基礎講読(古代語)

日本語学発展講読(古代語)

日本語学発展講読(現代語)

安本真弓

安本真弓

安本真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

和田真弓

日本語学演習 (古代語)	安本真弓	日本文学卒論発展演習	尾崎千佳
日本語学演習 (現代語)	安本真弓	日本文学卒論基礎演習	野坂昭雄
日本語学卒論基礎演習	安本真弓	日本文学卒論発展演習	野坂昭雄
日本語学卒論発展演習	安本真弓	日本文学卒論基礎演習	野坂昭雄
日本語学卒論基礎演習	和田真学	日本文学卒論発展演習	森野正弘
日本文学史 (中古)	森野正弘		
日本文学史 (近世)	尾崎千佳	二〇二三年度卒業論文題目	
日本文学史 (近代)	野坂昭雄	日本語学・日本文学分野	
日本文学特殊講義 (中古)	森野正弘	指導教員 和田 学	
日本文学特殊講義 (近世)	尾崎千佳	モダリティ「ソウダ」の在り方	
日本文学特殊講義 (近代)	野坂昭雄	— 形容詞との関係性をめぐって —	上月麻鈴
日本文学基礎講読 (中古)	中元さおり	音楽微分野からみたキャラクターの属性と名前の関連性	曾田桃夏
日本文学基礎講読 (近現代)	森野正弘	地方公共団体における「やさしい日本語」の活用	福井桜巴花
日本文学基礎講読 (近世)	森野正弘	指導教員 安本真弓	
日本文学基礎講読 (近代)	尾崎千佳	「尊い」の意味と対象の変遷	井上華
日本文学発展講読 (近代)	野坂昭雄	若年層における福岡方言との関わりと変化について	
日本文学基礎講読 (近現代)	中元さおり	助数詞「つ」と「個」の使用実態と分析	高口佑莉亜
日本文学演習 (中古)	森野正弘		福田聡太
日本文学演習 (近世)	尾崎千佳	指導教員 森野正弘	
日本文学演習 (近代)	野坂昭雄	『枕草子』日記的章段における〈終わり〉なき榮華	上坂優菜
日本文学演習 (近現代)	中元さおり	『源氏物語』における六条御息所の嫉妬の様相	江頭美空
日本文学卒論基礎演習	森野正弘	『源氏物語』末摘花による規範からの逸脱	岡本希美
日本文学卒論発展演習	森野正弘	『竹取物語』におけるかくや姫の流離と罪について	金城ほのか
日本文学卒論基礎演習	尾崎千佳	『とりかへばや物語』における混沌の秩序化	松本月乃

指導教員 尾崎 千佳

『五十年忌歌念仏』における自害の効果

『西鶴諸国はなし』『紫女』の典拠と主題

『春雨物語』『死首の咲顔』の構造と主題

『椿説弓張月』阿公論

『好色五人女』巻四考

— 結末の解釈をめぐる —

指導教員 野坂 昭雄

林美美子『雨』論

小川洋子『ことり』論

田中康夫『昔みたい』論

坂口安吾『不連続殺人事件』論

丸山健二『バス停』論

『パノラマ島奇談』における江戸川乱歩の芸術観

太宰治『逆行』論

尾崎紅葉『金色夜叉』論

中原中也の詩におけるサウンドスケープについて

指導教員 中元 さおり

村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』『1Q84』から見る

『損なわれること』とその回復

星新一作品における〈子ども〉と〈夢〉

『『ブランコのもこうで』を中心に』

宇土 智博

榊 彩乃

新保 沙絵

福原 柊子

山根 緑

尼子 珠緒

岩崎 愛恵

小寺 由芽

田中 琴望

遠武 留依

徳増 克則

姫野 友

藤井 日菜乃

渡邊 朱星

劇団四季ミュージカル『ユタと不思議な仲間たち』における
翻案とその背景

— 三浦哲郎『ユタとふしぎな仲間たち』との比較を通じて —

村上春樹『海辺のカフカ』論

— 『星野青年』と『開かれたアイデンティティ』

という可能性 —

江國香織『きらきらひかる』における恋愛の様相

森見登美彦『新釈 走れメロス』他四篇』論

『アダブテーション』の手法について

ライトノベルに描かれる異世界とその機能

— 『ノーゲーム・ノーライフ』を例として —

二〇二二年度修士論文題目

日本語学文学論

指導教員 安本 真弓

否定疑問文の用法における「じゃ」と「や」の違い

— 山口での調査結果を通じて —

指導教員 尾崎 千佳

素性と宇多歌壇

指導教員 野坂 昭雄

柳里文学における〈家族〉の再演

小田 果歩

榎木 壱葉

林 萌々花

外谷 春香

吉本 一稀

早川 佳佑

中村 涼帆

盧 瑩

○会員消息

徳永光展先生（一九九〇年卒業、福岡工業大学）が、『国際日本の探究―夏目漱石・翻訳・日本語教育―』（春風社、二〇二三年一月二日発行）を上梓されました。

執筆者紹介

森野 正弘 山口大学人文学部
岩野 訓子 一九七〇年卒業
榎原 葉子 一九七二年卒業
二階堂 整 一九八四年卒業
田中 敦子 一九八六年卒業
小野 美典 一九八六年卒業 日本大学
勘解由小路承子 一九八〇年卒業
柚木 靖史 一九八五年卒業、広島女学院大学
安本 真弓 山口大学人文学部
紀 実歩 二〇二三年卒業
林 伸一 特別会員、山口大学名誉教授
徳永 光展 一九九〇年卒業、福岡工業大学

二〇二三年度学会委員・会計監査

代表委員 和田 学
実行委員 尾崎 千佳（庶務） 中元さおり（会計）
伊東 達也（編集）
川鶴 隼也（3年） 立石結希瑛（3年）
委員 森野 正弘 野坂 昭雄 安本 真弓
中原 豊（一九八一） 金戸 清高（一九八二）
大田 直子（二〇〇三院） 末栢 昌子（二〇〇六院）

日高 友江（二〇〇六院）

佐々木翔太郎（二〇一〇院）

会計監査 奥嶋 明子（一九九二） 吹屋 葉子（二〇〇四院）

○編集後記

『山口国文』第四七号をお届けいたします。ご多用のなか玉稿をお寄せくださいました皆さまには、心より御礼申し上げます。

本号は、二〇二三年六月十九日に逝去された関一雄先生の追悼号として企画・編集いたしました。巻頭には、ご遺族のお力添えにより、在りし日の先生のお写真を掲げることができ、直接教えを受けた皆さまがたから、多くの追悼文や論文をお寄せいただきました。

私自身は、残念ながら関先生に直接お目にかかる機会がありませんでしたが、今回お寄せいただいた追悼文などを拝読して、あらためて先生のお人柄と、存在の大きさに感じ入っております。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

また本年は、思いがけず大災害から年が始まつてしまいました。この度の令和六年能登半島地震で被災された皆さまに、心からお見舞い申し上げます。

昨年よりSNSを使った情報交換も行われておりますが、本誌「会員消息」欄への情報提供や、学会運営全般に対するご意見なども、これまで同様、お気軽にお寄せください。

会員の皆さまのご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げますとともに、本学会のさらなる充実に向け、これからもご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

『山口国文』第四七号編集担当

投稿規定

- 一 内容 日本語学、日本文学、日本語教育、国語教育
に関する研究論文
- 一 枚数 四百字詰原稿用紙三五枚以内
- 一 期日 二〇二四年九月三〇日
- 一 送り先 〒753-8540 山口市吉田一六七七一
山口大学人文学部

日本・中国言語文学コース研究室内
山口大学人文学部国語国文学会

※本誌に掲載された論文等の著作権は著者に帰属するものとする。ただし、山口大学人文学部国語国文学会は、本誌に掲載された論文等を、学会もしくは学会が委託する機関において、電子化公開する権利を有するものとする。

山口国文 第四十七号

二〇二四年三月一日 発行

編集 山口大学人文学部国語国文学会
発行

代表者 和田 学

〒753-8540 山口市吉田一六七七一

山口大学人文学部

日本・中国言語文学コース研究室内

電話 (〇八三)九三三―五二七二(和田)

口座振替 〇一五四〇―一五四八六

印刷 有限会社 三共印刷